

リチャードロウエストン

## 『ブラバントおよび

## フランダーズ農業論』考

加用 信文

## 一

西欧の農業革命は、典型的には先進国イギリスにおいて、およそ一七六〇〜一八四〇年の間にかけて、ほぼ産業革命と並行的に実現されたことは周知のごとくである。この「封建制から資本制への移行」は、農業の生産様式の上からは、工業における手工業→マニユファクチュア（工場制手工業）→工場制工業の段階的移行に照応して、三圃式農法→穀草式農法→輪栽式農法の段階的移行として把握されうる。

この近代的な輪栽式農法への農法的変革の過程は、封建的な三圃式農法の基盤であるいわゆる共同体的な開放耕地制度の弛

緩による独立小農民経営の形成を経て、遂に共同体を一扫する大規模なエンクロージャーによる資本家的経営の成立として実現されたといえるが、その背後には封建的な生産関係を内発的に打破するいわゆる技術革命が先行したことを見落してはならない。それは技術体系の上では基本的には撒播・無中耕体系から畜力条播・中耕体系への移行として把握しようと考えられるが、より外見的な変化としては、作付方式の上での、三圃式農法における穀物連作方式から、いわゆる新作物 (new crops) つまり休閒作物としての莖葉作物の導入過程として現われる。輪栽式における作物的象徴とされる莖葉作物は赤クローバ (red clover) と飼料カフ (turnip) である。したがって、近代的農法の形成をこれら新作物の導入の面からみれば、その導入者が近代的農法の創設者という理解も成り立つ。この意味の導入者として、クローバについてはサー・リチャードロウエストン Sir Richard Weston、カフについてはロード・タウンセント Lord Viscount Townshend の名がイギリス農業史上大きく浮び上がる所以である。とりわけクローバの導入がカフに先んずること約一世紀前の一七世紀前半期とされるから、ウェストンが最初の新作物の導入者であると同時に、近代的農法の創設者としての榮譽を担うことになる。

かくて、ウェストンの名前は、一八世紀後半の農業革命の進

行過程における輪裁式農法の普及者とされるアーサーロウヤング Arthur Young から「ヒートン以上の大恩人」という讃辞が呈せられるほどのものとなったという。

ところで、赤クローハとカフのいずれも、イングラントの原産でなく、それらをはやくから栽培していたベルギー・オランダ・フランス等の大陸諸国から輸入されたことは確かであり、ヤンクのウェストンへの讃辞も、このようなイングラントへの最初の導入者とみなされていたからである。しかし、これは明らかに誤りであつて、これらの作物そのものはずでに一六世紀末頃までにはイングラントに導入されて、ウェストンの頃にはすでに栽培されていたことは、当時の古農書等によつて確認されることである。

ただし、それは耕地 *arable land* でなく、園地 *garden* の作物として栽培されていた。すなわち、当時の封建的な耕地制度では、共同体的規制の下で三圃式農法を運行するための三つの耕圃 *fields* により構成された耕地と、農民の宅地に付属する個人私有の小面積の園地または小圃込地 *croft* に二分されており、園地ではスペードによる人力耕耘と人力用中耕鋸 *hand hoe* による中耕・除草を行なつて、主として穀物以外の蔬菜・果実・工芸作物・飼料作物等の作物が個人の自由選択によつて、集約的に栽培されていた。とくに中耕（薅耕）を不可欠とするいわ

ゆるハ薅耕作物  $\checkmark$  Hackfrucht, hoed crops と呼ばれるカフ・馬鈴薯等の根菜類も、かなり古くから園地作物 *garden crops* として栽培されていたのである。

したがつて、クローハ・カフ等の導入は、すでに存在していた園地作物の耕地への導入と解すべきであり、このことはすでに定説化されているといえる。とすれば、タウンセントの方は、実践的な耕地へのカフ導入の成功者として十分な資格をもつものといえよう。タウンセントは華やかな政界での活躍のあと、ウォルポール Wolpol との政争に敗れて、一七三〇年頃に彼の所領のノーフォーク州レーナム *Ranham* に引退して、自ら大農場を経営し、その耕地でカフの栽培に成功してハカフ  $\checkmark$  のタウンセント 'Turnip' Townshend の綽名で呼ばれるほどの名声を博したからである。彼は後世さらにノーフォーク輪裁式の創始者としての評価をも獲得したのである。しかし問題は、単に耕地にカフを栽培したのではなく、カフに不可欠な条播・中耕作業を、従来園地のみで行なわれた人力体系から新しい畜力体系によつて、カフを園芸作物 *garden crop* から耕地作物 *field crop* に転化することに革新的意義がある。タル Jethro Tull の考案した畜力条播機 *till* および畜力中耕機 *horse hoe* が実用の域に達したのは、ほぼ一七七〇年頃であるから、タウンセントの時代に耕地へのカフ栽培に畜力体系が採られた根拠は

全くなく、彼は恐らく多くの人力を用いた園芸的方法によって、耕地でかなり大規模なカブ栽培を行なったとしか考えられない。近年タウンゼンドのカブ導入説は否定されて、その導入時期を一世紀近く遡らせる解釈がとられており、その場合ウェストンがクローバと同時にカブの導入者という説が行なわれている。しかし、そのことによって、タウンゼンドの導入説の時代的矛盾は解決されるどころか、かえっていつそう拡大されるものではない。<sup>[注]</sup>

〔注〕たとえばイギリス産業革命史研究において有名なアン・トントン T. S. Ashton が「最近の研究によると彼〔タウンゼンド〕は、このカブの創設者でなく普及者である」と述べている。これはおそらく先学の トインビー A. Toynbee<sup>(5)</sup> またはカニンカム W. Cunningham の説を継承した見解と推察されるが、両者いずれもその根拠を明示していない。タウンゼンドのカブ導入説は、すでに一九世紀初期に刊行されたラウドンの『農業百科事典』London's Encyclopaedia of Agriculture においても、<sup>(6)</sup>  
〈俗説〉(common story)として否認されている。<sup>(7)</sup>

またウェストンのカブ導入説は、現在経済史家のマン・トウ P. Manouk<sup>(8)</sup>、ブリッゲ M. Briggs およびジョルダン P. Jordan<sup>(9)</sup>、ローリスミス R. Trow-Smith<sup>(10)</sup> 等によって

《ノート》リチャード・ウェストン『ブラバントおよびフランタース農業論』考

支持されている。これはおそらくロード・アール Lord Rile の見解の踏襲と考えられるが、アールも、その根拠は明示していない。<sup>(11)</sup> いま筆者の知るかぎり、近年のウェストンのカブ導入説の出所は、前世紀の末のガルニエ R. H. Garner の論文「ブリテンへの飼料作物の導入」<sup>(12)</sup>に置くのが妥当と考えられるが、彼もその根拠を明示していない。これはおそらく前記のラウドンの『農業百科事典』に、ウェストンとはほぼ同時代人であるウォルター・ブライス Walter Blyth の有名な The English Improver improved, 1652 中で、ウェストンがカブで豚を飼育したと確言したという一節（その引用は原文とは大分内容が変えられている）から、ウェストンのカブ導入をやや毅然と想定しているのを、積極的な導入説に変えたとしか考えられない。なおこのガルニエは、前記論文および後記の著書で、近年最も多くウェストンに論及している一人であるが、その内容は文献的な軽卒な誤解によるものであることは、後述することくである。

ところで、ウェストンのカブ導入説の興味はいちおう措いて古くから動かしがたい定説とされているクローバ導入説についてみよう。彼が晩年サリー州サットン Sutton の地主として、自己の農場を経営したことは確かであろうから、その耕地でク

ローバを栽培したことはありうるとしても、カブにおけるタウセンセントの功績のごとく、実践的な成功者として近隣の注目を浴びたという形跡は全くなく、また彼がその導入を積極的に提唱して、当時の世評を高めたという記録も存在しない。たとえば、一七世紀後期の高名な農学者であり、当時の各方面の科学者および文化人等と広い交際をもち、その交友の記録をその生涯に亘って刻明に書きしるした有名なイヴリントン John Evelyn の Diary (一六四一〜一七〇四年) にも、リチャード・ウエストンの名は全く出てこないことから、彼のクローハ導入者としての名声のみか、その名前すら、一般に知られていなかったことが推察される。

しからば、ウエストンの名を後世にまで留めたものは何か。それは、彼が死の床で息子たちに遺言として書き残そうとした手記であり、それをサムエル・ハートトリブ Samuel Hartlib の手によって刊行された次の一書によるものである。

『フランダートおよびフランダース農業論』

A Discourse of Husbandrie used in Brabant and Flanders, shewing the wonderful improvement of land there [and shewing as a pattern for our practice in the Common wealth]

〔注〕 農書文献には、右のサブタイトルの括弧内の一句を加

えたものと除いたものとの両者があるが、これは後で考証することく、便宜的な省略の有無ではなく、両者は全く別系統の書であり、ウエストンの手記の最初の刊行書のサブタイトルは括弧を除いた方である。なおこの書名を、刊行者ハートトリブは「フランダート農業論」と略称しているが、一般には「フランダース農業論」と呼ばれる場合が多い。以下、後者の一般的略称を用いるか、ないしは便宜ウエストンの原著(Discourse)と呼ぶことにする。

これによって、ウエストンがヤングのいわゆる「ニュートン以上の大恩人」となったとすれば、この書はまさにニュートンの『自然哲学の数学的基礎(プリンシピア)』(一六四八年刊)以上に時代を革新した書と称しうるであろう。ウエストンの名はたしかに、その後ますます有名になり、イギリス農業史のみでなくイギリス経済史上に、農業近代化の功績者としてウエストンを挙げないものはほとんどない。しかも学的粉飾として、その原著を掲げたり、なかには、それを直接出典とすることまで記述がみられる。これはイギリス国外でも同様であり、たとえばオランダの有名な西欧農業史家であるヴァン・ハス Schelcher van Bath の近著<sup>(13)</sup>の中でも、一六世紀に胎動をはじめた西欧農業の近代化の過程に現われた有数の農業著述家のうちに「有名なフランダース農業論の著者」としてウエストンの名を挙げ、ま

たカフの導入に関連して、「これによってフランダーズ農法がイギリス農業文献の上で確たる評価を獲得した」と述べている。

しかるに、これらの多くの農業史家および経済史家の誰一人として、かくも有名なウェストンの原著自体を裏見し、それに依拠した正確な内容を記述しているとみられる者は見当たらない。というよりか、その原著とは全く別の著書と混同した非常識なわまる記述が、名著とされるものの中にも見うけられるのである。

しかも、これらの誤解に対して、これまでなんらの疑義も批判も表明されたことを知らない。イギリス農業史が戦後いぢじるしい発展を示し、とくに地域的・実証的な研究が目覚しく展開されているが、その反面かくも重要なウェストンの原著の検討が等閑視され、ウェストンを単なる伝承的な人物として、無条件的な權威が与えられているようにみえるのは、まことに不可解というほかはない。イギリスの学者すら、これを実見した形跡はないから、わが国でこの実物に接して、その内容を検討するすべをもたないことは勿論である。しかし、幸いにわが総研所蔵の「エメリー文庫」を中核とするイギリス古農書を探

索しているうち、どうやらいちおうの考証の筋道がついたように思えるので、敢てノートとして書き留めることにした。

注(一) 拙稿「近代的農法の形成過程」(日本農業の生産構

造)昭和三七年所収。

(2) Lord Ernle, *The English Farming, Past and Present*, 1912, new edition, 1961, p. 107

ただし、この出典は明示していない。ヤングの代表的著述を探したか、いままでのところ出所を明らかにしえない。

(3) Arthur Young, *A Six Tour through the Southern Counties of England and Wales*, 2nd ed. 1769, Introduction viii.

ここに次のとき問答体の叙述がある。「いつ頃からカブがイングランドに導入されたか? タルから? 誰がクローバを導入したか? サー・リッチ・トリーウェストンである。ノーフォークの泥灰土利用

はロード・タウンゼントとマレン Allen 氏である。」

(4) Thomas Southcliffe Ashton, *The Industrial Revolution 1760-1830*, 1948 中川教一郎邦訳、二九頁。

(5) Arnold Toynbee, *Lecture on the Industrial Revolution of the Eighteenth Century in England*, 1884 川喜多孝哉邦訳、二九頁。

(6) William Cunningham, *The Growth of English Industry and Commerce during the early and middle ages*, 1890, Vol. II, p. 357

(7) *London's Encyclopedia of Agriculture*, Vol. I, p. 49

- (8) Paul Mantoux, *The English Revolution in the Eighteenth Century*, 1928, revised ed (1961) p 151. footnote
- (9) M. Briggs and P. Jordan, *The Economic History of England*, 10th ed p 172
- (10) Robert Trow Smith, *English Husbandry*, from the earliest time to the present day, 1950, pp 122~3.
- (11) Lord Ernle, op cit p 107
- (12) Russel H. Garner, *The Introduction of Forage Crops into Great Britain—The Journal of Royal Agricultural Society of England*, 1896 (3rd Series, Vol VIII, pp 79~97)
- (13) R H Schlicher van Bath, *The Agrarian History of Western Europe*, A D 500~1850, (English edition by Olive Ordish) 1954, p 205

II

イギリス経済史および農業史上に不朽の名を後世に残こしたリチャート・ウェストンの著者に関して、おそらく最も広く一般に知られているのは、すでにイギリス農業史研究の古典としての権威が与えられているブーンルの大書 *English Farming*.

Past and Present の中の、次の一節であらう。

「彼〔ウェストン〕の觀察の結果を具体化した『フラハントおよびフランタース農業論』は一六四五年に息子たちのごす遺言(Legacie)として記されたものである。この遺言の、その後の成りゆきは奇異である。これは手記の形のまま流布され、その一つの不完全なコピーをサミュエル・ハートリブが入手したのを、彼はそれを八国務会議諸公に捧ぐという阿諛的な献辞を付して、一六五〇年に無断で刊行したのである。その翌年、ハートリブは筆者の名前を知って、より完全なコピーを入手したいと思つたようである。そこで、彼はウェストンに二通の書簡を送つて、彼の論述を増訂したいと依頼した。それに対し、なんらの応答がなかつたので、彼は一六五一年に、その論文 (treasure) を再版した。」

この短い記述の中には、刊行年次等についてあとで検討すべき疑点が含まれているが、この書の刊行の経緯はいちおう明らかにされている。すなわち、この書は、ウェストンが本来公表の意図なしに、息子たちへの「遺言」(Legacie)として誌るされた手記が元であり、このコピーを入手したハートリブによって無断で刊行されたものであるということである。このことから当然想起されるのは、ハートリブ自身の名を冠した『遺言』

Legacy なる著述が一六五一年に刊行されている事実である。

これは、周知のごとく、代表的なイギリス古農書の一つとされ、従来多くの著書に引用されているところのものである。その初版のタイトルページには、次のごとく記されている。

サミュエル・ハートリブ「遺言」、プラバントおよびフランダーズ農業論の増補」

Samuel Hartlib has Legacy or An Enlargement of the Discourse of Husbandry used in Brabant and Flanders.

Wherein are bequeathed to the Common-wealth of England more Outlandish and Domestick Experiments and Secrets in reference to Universal Husbandry—London, Printed by H. Hill, for Richard Wodnothe at the Star under St. Peter's Church in Cornhill, 1651

この書名(の his Legacy とごうのは、一見ハートリブ自身の遺言のごとくであるが、当時の著書にしばしばみられる著者名に続く "his" という表現は、単にその著の意に用いられており、そのサブタイトルによれば、明らかにウェストンの『プラバントおよびフランダーズ農業論』の増補版を意味する。したがって、その書名はウェストンの「遺言」と解するのが妥当である。前掲のマーンルの記述と関連して考えれば、ハートリブがウェストンの不完全なコピーの刊行の直後、完全なコピーを導入

手できて、それによって主題のみを変えた増補版を刊行したとく解される。もっとも、マーンルの記述では、ハートリブが増訂の依頼をウェストンに出したのに対し、その応諾がなかったから、前の原著の再版をこの「遺言」と同年に刊行したというのは、符節が合わない。

この原著の再版についての考証は、あとに残すことにして、ここで容易に確認されるのは、このハートリブの『遺言』とウェストンの手記による『フランダーズ農業論』とは、全く別物であることである。というのは、『遺言』はかなり多く現存している書で、ウェストンの原著のごとき稀覯書でないから、その方の内容を一見すれば、ウェストンの手記でありえないことは明白となるからである。すなわち、この初版によれば、その冒頭のハートリブの序の次に「サリー州サントンの故サー・リチャート・ウェストンの息子たちへの遺言 (his Legacy to his Sons) 一六四五年」と題した三葉の書簡体の遺言の言葉があり——これがあとで考証するごとくウェストンの原著の序を引用したものと推定される——、これに続く本文の題名は「イングランド農業の欠陥とその矯正法に関するサミュエル・ハートリブ氏宛の長文書簡」(A large Letter concerning the Defects and Remedies of English Husbandry, written to Mr Samuel Hartlib) と称するものであるからである。

この書簡には、筆者の名を記してなく、翌年に刊行された第二版でも同様であるが、一六五五年の第三版ではじめて、その署名欄にロバート・チャイルド Rob. Child の名が書き込まれて、その筆者を明らかにしているのである。ハートリプの『遺言』の内容がウェストンの手記による原著とみられないことは、もはや疑う余地はない。しかも、この長文書簡の中で、第五番目の欠陥として他国の農業知識の欠如を挙げ、フランターズ農業に関し「この国にここから多大の利益を生み出しうることは、イングランドに住むわれわれにとって、きわめて有益であり、しかもこれまで知られなかった種々の点を簡明に記述した

貴下刊行のフランターズ農業に関する優れた論文によって証明される」とあるのは、ハートリプ刊行のウェストンの原著を指したものとしか考えられない。この言葉からも、ハートリプの『遺言』の刊行以前にウェストンの原著が刊行されたことが裏書されると考えられる。

かくて、ハートリプの『遺言』は、そのサブタイトルとウェストンの遺言の序文を付することによって、一見ウェストンの原著の増補と紛らわしい形式を作為的にとったものであるが、第三版では書名の Legacy を Legacy とし、サブタイトルからはフランターズ農業論の増補である表現を削り、さらに冒頭のウェストンの序文を省いてしまっている。その内容は前記の

チャイルドの長文書簡に、その注釈 (Annotation) として、ビーチ博士 Dr. Beati の書簡、その他の数々の論述を寄せ集めて増補したものとなっているが、この中に前記のウェストンの遺言の序をハートリプが改竄した一文を末尾として入れている。なお、この収録の中に、ウェストンのクローバ栽培法に関する短文が収められているが、これはあとで述べるごとく、注目すべき記述であることを、ここで注意しておきたい。

〔注〕ハートリプの『遺言』は、ウェストンの原著との関係で、しばしば論及するから、各版の簡単な考証を記しておきたい。

初版 (一六五一年刊) —— その題名は本文の通り。この原著は、私の知るかぎり、わが国には存在してないようである。ドナルド・マクドナルド Donald McDonald のイギリス古農書の文献史的著述 Agricultural Writers の中には、この初版のタイトルページの写真版が掲げられている。<sup>(3)</sup> 四ツ折判で、その構成は、ハートリプの伝記の著者であるタークス H. Dircks によると、<sup>(4)</sup> 冒頭の三葉がハートリプの序文 (address) とウェストンの息子たちへの遺言 Legacy の序があり、続いて本文の長文書簡が一〇八頁に掲げられており、そのあと他の短い書簡が付加され、全部で一七七頁であるという。この書



簡の筆者を、タークスは後述するウォルター・H・ハート  
Valer Harte に拠って、チャイルドと記しているのは、  
かえって、彼が書簡の筆者の明記された第三版を實現し  
てなかったことを裏書きしている。

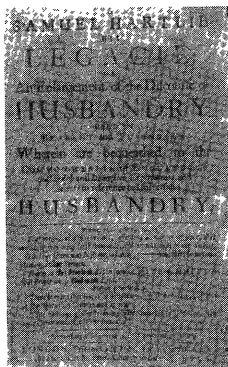


写真1 HartlibのLegacie 初版  
(1651)のタイトルページ

第二版(一六五二年)——これは東大図書館所蔵のも  
のがあるから、内容は確認される。タイトルページの表  
題は初版と同じであるが、その下に「付録(Appendix)  
追加」とある。その冒頭にハートリブの「読者への序」  
(To the Readers)三葉、続いて同じウエストンの遺言の  
書簡体の序が三葉ある。初版が両者を併せて三葉とすれ  
ばかなり変更されているかもしれない。ウエストンの遺  
言の末尾に注記があり、「これまでがサー・リチャード・ウ  
ェストンのプラバント農業論(the discourse of Brabant

Husbandry)の序文。これは近く増訂した第二版(a  
Second Edition, corrected and enlarged)として刊行  
される予定」とあるところに、注意を引いておきたい。  
つぎの本文の長文の書簡が一〇八二頁。これに続いてタ  
イトルページにある付録は「農業の遺言に対する付録」  
(An Appendix to the Legacy of Husbandry)の題名

の下に、「ハートリブの書簡式の序をつけた」「農業の遺言  
に関する注釈」(Annotation upon the Legacy of  
Husbandry)と題したバリからの、一六五一年七月一日  
〜一六五二年一月一日に亘る五通の無署名の書簡があ  
り、一一八頁で終わっている。この付録の五通は初版の最  
後の書簡五通と同一のものと思像されるから、そうであ  
れば、第二版にとくに付録が追加されたことにはならな  
い。

第一版と同一刊行所で、同じく四ツ折判クワターであるが、序  
を除いても、本文の頁数が異なるのは、何によるかはい  
まのところ校合しえない。

なお、この第二版を底本とした飯沼二郎氏の邦訳『彼  
の遺言・或はプラバント及フランダーズ農業論』(経営  
調査資料 No. 6 農業技術研究所経営土地利用部 昭和二  
八年一〇月刊)がある。

Enlargement in this Third Edition, 1655

これには第二版まであった冒頭のハートリブの序文とともに、ウェストンの「遺言」の序まで削られ、その代りに一七世紀前期のノートン John Norden の名著 *Surveyors Dialogue* (1607) からの短い章句が掲げられている。「遺言」*Legacy* という書名は、もはや形式的にもウェストンとは全く無縁となった。その内容は、従来の長文書簡(一一一七頁)が収められているが、この書簡中の字句にかなり訂正かなされされており、書簡の署名欄にはじめて Rob. Child の名が記入されている。このあとに、本文の約二倍の量に上る「遺言に関する注釈」(Annotations upon the Legacy) が追加(一一八〜三〇三頁)されている。この最初に前掲のバリ発の五通の書簡があるが、これにも「アーノルド・ビーチ博士の注釈」(Arnold Bear's Annotation) と記して筆者を明らかにしている。このほかいろいろな書簡や論述が雑然と収録されているが、その中には、本文で指摘しておいたウェストンのクローバに関する記述のほかにも、ウェストンとは同時代の有名な農業著述家カプリエル・プラント Gabriel Plates の穀物点播に関する実験を記述した貴重な論文 Certain Notes, and Observations concerning

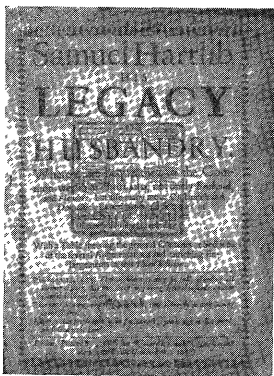


写真2 Hartlib の Legacy 第3版 (1655)のタイトルページ

第三版(一六五五年)——これも最近総研図書館で入手した原本を閲覧しうる。このタイトルページは、次のとき技巧的な変更がなされている。

Samuel Hartlib his Legacy of Husbandry, wherein are bequeathed to the Common-wealth of England, not only Brahand and Flanders, but also many more Outlandish and Domestick Experiments and Secrets (of Gabriel Plates and others) never heretofore divulged in reference to Universal Husbandry. With a Table shewing the general Contents or Sections of several Arguments and enriching

Setting of Corn, and the great benefit thereof, Together with the several Experiments and Improvement, imparted by Gabriel Plats to Mr Harthub および Mercurius Laetificans の二篇が収められている。(この二篇とも、後述するフノセルの農書考証の上では、すでに消失した農書の中に挙げられているものであり、いまだこれらの内容に論及した研究をしない。) この付録の最後の結びとして、従来序文とされたウエストンの遺言の一文が置かれているが、これは無残にもハートトリブによって改竄され、しかも息子たちへの遺言としての書簡体の表現でなく、一般的な記述に直されている。

この第三版が『遺言』三版の中で、内容的には最も豊富な貴重なものである。たとえば、良心的で博識な古農書通のハートのごときは、その著述では主としてこの第三版を利用してゐる。本稿でも以下この第三版を底本として用いることにしたい。

ところで、このハートトリブの作偽的な『遺言』なる書名と、そのサブタイトルによつて、従来のイギリス農業史および経済史上におけるほとんどの著述では、これをもつて有名なウエストンの原著と誤解し、しかもウエストンの言葉として掲げられているものの大部分も、このハートトリブの『遺言』からの引用

であることが指摘されうるのである。

このような誤解はウエストンの原著が稀覯書として実見しえないことよりも、実見するにさほど困難でない『遺言』の内容がほとんど検討されてない粗漏を裏書きする。それにしても、『遺言』の本文をなす長文書簡の筆者がチャイルドであることが明白にもかかわらず、この中の記述をウエストンのものとして利用すること自体が、まことに無神経といわねばならない。ここに書名を挙げて一々その引用を指摘する頃は省くが、前記の栽培牧草のイギリスへの導入に関する論文によつてウエストンの功績の再認識を喚起したガルニエ R. M. Garner を例にとろう。彼は、すでに一種の古典とされている主著 *History of the English Landed Interest, 2 Vols. 1892-3* において、ウエストンに関してかなりのスペースを費している。そこでウエストンの言葉として用いているのは、*荒蕪地および森林の所有権に関する内容のものであり、これは明らかにハートトリブの『遺言』のチャイルドの長文書簡の中にみられる記述である。*ただしこの場合、彼が出典としているのは、後述するウエストンの名を冠し、内容的には『遺言』の不完全な覆刻版でしかない *A Treatise of the Husbandry and Natural History of England, 1651* (この書名も正確でなく、またその刊行年次の一七四二年をわざと一六五一年に変えている) を用いている。

なおカルニエは、前記の栽培牧草に関する論文では、ウェストンの『フランダーズ農業論』第二版（二六五二年）を典拠として用いているが——この刊行年次によると、これは明らかに『遺言』の第二版としか考えられない——、これも軽率な誤りというには、あまりにも重大である。しかも、この重大な誤りに対し、なんらの疑問も提起されたことを知らない。その他の著述にもウェストンの名は掲げてあっても、ハートリプの『遺言』と混同しているものが大部分で、ハル Hallのごとく、両書の実質的内容は同一と断言している者はあっても、両書は内容的にも別物であることを断定している記述には出会わない。

ただイギリス農業史の最高権威の一人とされるアーンル——その主著 *English Farming, Past and Present, 1912* はすでに古典として位置づけられている——は、古農書に精進している点でも有名であり、その主著の付録に付せられた古農書のリストが広く利用されるが、そこでウェストンの経歴と功績を記している一節に、『遺言』には見当らないウェストン自身の言葉らしいものが引用されている。この内容についてはあとで検討することにするが、その出典は全く明示されていない。ところで、この古農書リスト中のウェストンの原著の小解題には「ハートリプはこの著書 (Discourse) を翌年 / 彼の遺言 (His Legacy) として再刊した」とあり、またハートリプの『遺言』

の方の小解題では「これはウェストンの著作の再版であって増補ではない。……」と記し、両書の内容を同一物と混同している。したがって、このアーンルの記述も、ウェストンの原著に拠らず、他書から引用したものであることが推察される。

さらにウェストンの原著と『遺言』とは別物であることは、ウェストンの原著を実見しなくても、その記述の分量の異同からも推測されるはずである。これに関しての手がかりは、後述するごとく存在するにもかかわらず、従来むしろこれを隠蔽しようとする態度がみられるのである。たとえば、イギリス古農書の研究で有名なドナルドIIマクドナルド Donald McDonald のウェストンの評価に関する次の一節は、その代表的な一例である。

「サー・リチャードIIウェストンがブリテンの改良農業 (improved husbandry) の基礎をきずいたことは、ことに認められている。しかし、彼の論文 (treatise) において、与えられた勧告 (recommendation) に従うことによって、イングランドは実に尤大な利益を獲たことは『科学紀要』においても特記されている。」(傍点一引用者)

この一文は、実は同名異人のリチャードIIウェストンからの孫引であるが、ただマクドナルドは傍点を付した箇所について「勧告」という用語に修正し、いま一つ重要な形容詞を意識的

に削除しているのである。それは巧妙な作爲的な工作であるが、その理由はあとで明らかにすることにして、いましばらく伏せておこう。この引用文中の『科学紀要』(Philosophical Transactions)とは、一六六二年に当時のイングランドの主要な自然

科学者によって創立された「ロンドン王立学会」Royal Society of Londonの機関誌であり、その刊行期間は一六六五—一八一六年に亘っているが、ウェストンに論及した記述の掲載巻数等は記されていない。その後もこれを探索した文献は見当らない。

〔注〕 このフィロンファイは、現在の哲学という意味よりも、自然哲学しかも主として科学の意味であり、王立学会の前身の科学者の集りも Philosophical Society と称していた。有名なウイリヤムIIベティーも、この王立学会の有力な会員で、ハートリフとも交友があった。

注(一) Lord Ernie, The English Farming, Past and Present, 1912, new edition 1961, p. 108

(二) Samuel Hartlib, Legacy, 3rd ed p. 69

(三) Donald McDonald, Agricultural Writers, from Sir Walter of Henry to Arthur Young, 1200—1800, 1908, p. 69

(四) H. Durks, A Biographical Memoir of Samuel Hartlib, 1865, pp. 63—64

(五) R. M. Garner, History of English Landed Interest,

Vol. II, 1893, p. 154

(六) Ernie, op. cit. p. 477

### III

近年のイギリス農業史および経済史の文献において、ウェストンの名のみ高くして、その原著の内容が正しく把握されていない理由は、この原著は前述のごとくきわめて稀覯本であり、或はすでに消失した書(vanished book)とも思われる。とすれば、時代を次第に過去に遡らして、その刊行当時までの農書を探索してゆけば、その原著を実見したと思われる記述に出会うかもしれない。そこで、私は絵図図書館で当りうるかぎりの文献を探ってみたが、残念ながら、やや示唆的な断片や出典不明の間接的な記述のほかには、原著の具体的な内容を知りうる材料には出会わなかった。もとより一七世紀中期以降の膨大な数の農書を残さず当ったわけではなく、中には Miller's Gardener Dictionary など是非一見したいと思つた文献に接しなかつたが、少なくとも各時代の代表的農書からは、ほとんどその確実な手掛りは得られなかつたといつてよい。しかし、便宜次の三期に分けて、ウェストンに対する時代の認識の程度をみてみることにしよう。

(一) まず一八世紀後半のいわゆる農業革命の展開しはじめた

時期に、多くの農書が統刊され、とくに農業改良会 Board of Agriculture を中核とするジョン・シンクレーパー John Sinclair、ジェームズ・リアンダーソン James Anderson、アーサー・ヤング Arthur Young、ウィリアム・マーシャル William Marshall 等の有力な農業著述家が輩出したが、これらの著述および報告書類にも、農業近代化の創設者とみられるウエストンの原著に關する記述は見当らず、その評価も発表されていない。なおウエストンの功績を高く称揚したヤングも、ウエストンを単にクローバの導入者とする以上に、その原著に關する具体的な記述はなく、しかも彼はウエストンの原著とハートリフの『遺言』とを混同する誤りを犯している。<sup>〔注〕</sup>

〔注〕 ヤングがウエストンの原著を出典として用いているのは Farnet's Letter 1761 にある。この書の中で、外国農業に關する完全な知識を得ることの必要性を述べた本文の脚注に、「一六〇〇年から一六五〇年までのフランダーズとフランドトを考へた者は誰でも、イングラントがかつて半世紀前に成し遂げたと同等な、またはさらにそれ以上の改良が行なわれたことを知るであらう。」という一節があり、その出典として、Harlib's Legacy 1653, Sir Weston's Flem. Husband 1648 と併記してゐる箇所である。この本文の趣旨は、明らかにハートリフの

『遺言』中の長文書簡中の欠陥に述べられているものであり、これに対する右の注記は単なる一般の記述で、その出典とは直接関係はない。しかも、この出典とするウエストンの『フランタース農業論』の刊行年次を一六四八年としているのも不可解である。

なおヤングが主幹した月刊誌 Annals of Agriculture (1784~1815)には、一七九三年に数字に亘つて Writers on Husbandry (Vol. XX, pp. 481~492, Vol. XXI, pp. 430~465, 575~601)と題して、ノーデン Norden、マーカム Markham、ブライヌ Blith 等のウエストンとは同時代人をとりあげて記述しているが、ウエストンおよびハートリフは、なぜかとりあげられていない。

以上のことは、農業革命展開の過程では、ウエストンの現段階的意義はもはや失われたことを裏書きしているとも考えられる。ただ、この時期における古農書の考証家として傑出してゐるウィリアム・ハート・William Harte と、それを継承してゐるとみられるウエストンと同名異人のリチャード・ウエストン Richard Weston の二人の著述については、あとの文献考証の際に述べることにし、この二人の業績をも吸収している一九世紀前期のラウトンの農業百科事典 London's Encyclopedia, 1825 の中では、ウエストンの経歴等に関するかなり詳しい記述がみら

れるが、『フランダーズ農業論』の内容にはふれられていない。ただウェストンが一六四五年にクローバについての栽培法を示したことに關して、ウェストンの言葉を三人称に直したとみられる次のとき一節があることを、特記しておきたい。

「彼は一六四四年六月一日にアントワープ近傍で、二吋以上の丈に、非常に密生したそれ(クローバ)を刈取っているのを見た、また再び同月二九日に、二〇吋の丈になったものを見、さらに三回目は八月に一八吋の丈になっているのを刈取るのを見た」<sup>(2)</sup>

(2) つぎに、一八世紀初期の農業革命の黎明期ともいえる時期には、プラントレー Richard Bradley、モーターマー John Mortimer、シモン・ローランス John Laurence、エドワート・ローランス Edward Laurence、ライル Edward Lisle、タル Jehro Tull 等による優れた農書が刊行されたが、これらの農書類の中でも、ウェストンの原著に論及したものは見当らない。とくに、タルの劃期的な Horsehoeing Husbandry, 1733 には、ローマ農書をはじめ多くの先学の農書を検討しているが、この中でもウェストンの原著のみでなくハートリプの『遺言』にも全く注意が払われていない。

ところが、タルの論敵として激しい批判を行なったスウィンナー Stephen Switzer の The Practical Husbandman and

Planter, 2 Vols. 1733~34 には、タルがベタンチックと呼んたほどの多くの農書による博引傍證的な記述があるが、その中には図らずも、かなり多くのウェストンの言葉として引用された箇所が見出される<sup>(3)</sup>。しかし、その一々の挙証は省くが、その大部分はハートリプの『遺言』からの引用であることは明白である。にも拘わらず、タルははじめ当時の農書がなんらその誤用を指摘していないことは、一八世紀の初めには、すでにウェストンの原著はほとんど眼に触れる機会が失われて、ハートリプの『遺言』と混同されていた——或は意識的にウェストンの名を利用するための使用が行なわれていた——ことを裏書きしているように思われる。たゞスウィツァーの上記の著書の中で、ウェストンのクローバに關する記述は、『遺言』中には見当らないものであるが、その出典を明記していない。なお、スウィツァーはウェストンの手記の経緯にふれ、彼がクロムウェル革命によって海外に逃避した王党員 (Royalists) であり、彼が逃避地から国内の友人宛ての通信がハートリプの『最後の遺言』Last Legacy の書名で刊行されたという推測的な記述がある。いずれにしても、彼はウェストンの原著と『遺言』とを混同していることは確かであるが、たゞその市販の刊行についての次の記述は、根拠は不明としても、いちおう注意に留めるに足る。

「この書は(書籍販売業者の操作によって)数種の異本が

刊行されているから、そのうちの最も価値の高い書を手に入れた場合にも、おそらく三分の一の部分が欠如したものであろう。しかし、たとえ省略されたり割愛されていたにせよ、農耕に関し、とくに牧草種子による土地改良について述べられている部分は、その原作からとられたものであることは疑いない<sup>(5)</sup>。(傍ル一引用)

(3) 最後に、一七世紀中期のウェストンとはほぼ同時代人の代表的農書に当ってみよう。まず、一六五〇年代のはじめに、ハートリブの『遺言』と並んで刊行された有名なフライス Walter Blith の『The English Improver improved, 1653』にはウェストンがカフを豚の飼料として飼育したことを確言したという後世ウェストンのカフ導入説の根拠とされた記述がみられるほかには、ウェストンの著書には全くふれていないが、その序文においてハートリブの『遺言』を高く評価し、その教訓を遵守すべきことを説いている。

次に、それから約一〇年後に刊行されたワーン、John Worlidge の有名な Systema Agriculturae, 1564 についてみれば、彼はイギリス最初の農業百科事典 Dictionarium Rusticuum の編者に擬せられるほどの農書の博識家であり、この著の巻頭にも多くの参考文献が掲げられているが、この中に、ハートリブおよびウェストンに関して、次のとき書名を挙げている。

Harth's his Husbantry of Brabant and Flanders  
And his Legacy with annotation of it  
Sir Richard Weston, His Legacy, etc

これによると、ウェストンとハートリブの書名が逆になっているようだし、またハートリブの中にも注釈つきの『遺言』が挙げられているが、これはおそらくその第三版(一六五五年)を指すであろう。なお、ハートリブの Husbantry of Brabant and Flanders というのも止式なタイトルと異なるから、ワールンシが果して、本来のウェストンの原著を裏見していたかどうかは疑問である。しかし、その著書の本文の中には、明らかに『遺言』には見られないウェストンのクローバに関する記述が三箇所に見えてみられる。これは同時代人の記述として、ウェストンの原著の内容を考証する上の重要な資料であるとしなければならぬ。すなわち――

「サー・ウェストンによれば、一エーカーの土地から約一〇ホンド、つまり容量にして二分の一ベック(Peck)のクローバの種子がえられるであろう。」

「サー・リチャードIIウェストンは息子たちに対し、燕麦が発芽したときに、クローバを播種せよ、しかも他のどんな種子や穀粒とも混じらないで単独に、(ALONE)に播種してもよく、またそれは八月上旬までには十分刈取りができ



るであろうと、忠告している。」(傍点は原文ではとくに大文字)

「サー・リチャード・ロウエストンは一エーカーから五フンネルが得られると保証した……。」

ところで、これはハートリブの『遺言』の第三版(一六五五年)の注釈の中に混入しているウェストンのクローバ栽培法に関する二頁の記述と照合してみると、全部この短い記述の中からの抄出であることが判明する。この短文がウェストンの手記の全文とみられないかぎり、これからの引用は勿論ウェストンの原著からの直接の引用とはいえない。しかし、これに關しては、あとで再びとりあげることしよう。

他の当時の文献としては、とくに、栽培牧草および根菜類について述べられているスピード Ad Speed の Adam Out of Eden, 1658 には、クローバに關するウェストンの実験についての記述があるというが、これを調べるすべがなかった。また、最初のクローバのモノクラフィーとして有名なヤラントン Andrew Yarranton の The Great Improvement of Land by Clover, 1663 の中に、ウェストンがとりあげられているかまじくかも、確かめる必要がある。また前述のロントンの王立学会 Royal Society の機関誌『科学紀要』にも、かなり多くの農業関係の論文が掲載されているはずであるから、これをも参看

したいものである。しかし、当面いずれもあきらめざるをえなかった。

叙上のごとく、ウェストンの著書の刊行された一七世紀中期頃まで遡って、各時代の主要農書類を探索した結果、とくに原著の全容を明らかにしうる材料、またこの原著の論旨を明示的に継承・発展せしめた論述は見出しえなかった。しかも、かえって時代を遡るにつれて、ウェストンの原著にはほとんど関心が払われてないようである。またウェストンの名も、当時のノーデン、マーカムまたは刊行者のハートリブ等の声名にはるかに及ばなかったと推察されるのである。逆に時代が遠去かるとともに、ウェストンは歴史上の伝承的な人物化し、それと同時に、その著述は一種の幻の書として神秘化された顔がある。

そこで、探索の視角を換えて、つぎには主として古農書の書誌的な研究の上で、ウェストンの原著についての程度のこと

が明らかにされているかを検討しよう。

(一) Arthur Young, Farmer's Letter, 1761, 2nd ed. 1768, p. 458, 3rd ed., 1771, p. 466

(二) Louton's Encyclopedia of Agriculture, 1825, Vol. I, pp. 43~46

(三) Stephen Switzer, The Practical Husbandman and Planter, 2 vols. 1633~4, Vol. I, pp. 7~24, Vol. II,

- pp. 187~188
- (4) *ibid* Vol I, Introduction, xiv
- (5) *ibid* Vol. I, Introduction, xiv
- (6) Walter Blith, *The English Improver* improved, 1653, p. 260
- (7) John Worlidge, *Systema Agriculturae*, 1664, pp. 26~27

四

イギリス古農書の本誌的研究の上でまず参看すべきは、イギリス古農書に関する従来の文献考証の成果をもとり入れた集大成的な業績をもつフノセル G. E. Fussel<sup>(1)</sup> につくのが本道であろう。彼によると、ウェストンの『フランターズ農業論』の原本は大英博物館に所蔵されており、それは四ツ折判、発行所は William Du-Gard<sup>(2)</sup> 刊行年次は印刷では 1605 とあるのを、インクで 1650 に訂正してであると記している。この刊行年次は、この書の考証上の問題の一つとなるが、フノセルは、あとで述べるアーニルの一六四五年説に対し、この訂止通りの一六五〇年と推定している。

また、フノセルによれば、この第二版は一六五二年に初版と同じ発行所から刊行されたとして、ただこの方は小型四ツ折判

になり、ハートリブによる〈改訂増補〉(corrected and enlarged) されたもので、巻末にハートリブからウェストン宛の二通の書簡が付加されているという。このうち一六五一年五月二日付の書簡の冒頭に「私はききにフラバント農業の名で刊行した論文 (treasure) の著者は貴下であることを、確かな筋から知った」とあると記している<sup>(3)</sup>。しかし、この第二版の所蔵場所は示されていない。

ここで疑問が生ずるのは、フノセルは、原著の発行所、その判型および付録の書簡等について明記していながら、その頁数および本文の内容についてはなんらふれていないことである。

その内容に関しては、間接的ではあるが、フノセルがアーニルの前掲著に増補改訂を加えた新版の編纂に当り、その新書版のはじめに載せた優れた論文ともいえる長い序文で論及している。その中でウェストンに関しては、カフ導入説について、彼はアーニルによって「すっきりと承認された (thansamely recognized)」と述べているが、兩人ともウェストンの原著中にカフ導入説を裏づける記述があるという典拠は、どこにも示されていない。

フノセルの述べ方は、あたかもウェストンの原著を実見したごとく記されているが、そのこと自体が疑わしくなる。とすると、フノセルは果して何に基づいて前述の考証的な記述をした

であろうか。これは案外手近に、その種本が発見できたのである。それは一八六五年に刊行されたヘンリー・タークス Henry Drucks の *A Biographical Memoir of Samuel Hartlib* がこれである。この書がフッセルの種本であることは、前記の初版・第二版の発行所等についての記述が全く同一であるばかりでなく、とくに第二版に付加された前記のハートリブの書籍の引用部分がそのままタークスの引用と一致していることは、これを単なる暗合とはみなしえないからである。このタークスの著書は、ハートリブに関する刊行書の文献的考証を目的にしたもので、その具体的内容にはほとんど論及していないが、書誌的な考証は精密であり、たしかにウェストンの原著を、実見した一人とみて間違いないと推察される。したがって、タークスによるウェストンの原書の初版および第二版のタイトルページの書名と、これに關しての記述を、次に摘記しておこう。

#### 初版

A discours of Husbandrie used in Brabant and Flanders, shewing the wonderful improvement of Land there, and serving as a pattern for our practice in this Commonwealth. 4to, -London, Printed by William Du-Gard, Anno Dom 1605 [1650]

この初版の書名は *discours* となっており、サブタイトルは、

《ノート》 リチャード・ウェストン『プラバントおよびフランターズ農業論』考

前掲の括弧内の句を含めた最後が *Common-wealth* で終つてゐるものであること、しかも刊行年次は 1605 とあつて、明らかにフッセルの同じ誤植本である。これにタークスは、1650 と推定年次を括弧で示している。

ところで、この初版とされる誤植本には、冒頭にはハートリブの△國務會議諸公に捧ぐ▽「To the Right Honorable the Council of State」という献辞三葉がついており、これはタークスの表現によると、「彼の常套の聖書的な奇妙な文体」(his usual scriptural and quant style) で記されているとし、その献辞の一部を引用している。その中で彼は共和国 (Republic) のために奉仕するのを光榮とする旨を述べた箇所のもとに、「農業が *Common-wealth* に属する最も貴重にして必要な産業部門の一つであり、ひとびとの間の相互交易の最初の基礎であり、且つすべての秩序ある社会における富の源泉である」の一節を引用している。その最後に、「この著者 (the author of the Discourse) の言葉として、次の言葉が引用されてゐる。

「私は三〇年の農業の経験を経て、自分の土地をこの王国の誰にも劣らず改良したあと、イングランドを離れたときには、すでにその点(土地条件および適当な種子に関する)を知つていた。」

これに続いてタークスは、「しかし彼の外国での経験は、彼に

ハヒース地および砂質地Vの改良を教えた」とつけ加えている。このウェストンの言葉らしい「三〇年の農業の経験」による土地改良の成功ということは、年令的にみても、また彼の遺言の序文等からみても、俄かに信じ難いが、これが無条件的に、後に述べるアーンル等によって、ウェストンの事蹟として採用されている。しかし、彼等が、この出典に直接当たったものとは考えられない。

## 第二版——

Discourse of Husbandry used in Brabant and Flanders, shewing the wonderful improvement of Land there, and serving as a Pattern for our practice in this Commonwealth. The second edition, corrected and enlarged. London, Printed by William Du Gard, dwelling in Suffolk-lane near London-store small 4to. Anno Dom 1652

これには冒頭にハートリブの同じ献辞が続いて、新たに彼の「読者への序」(address to the reader)があり、その末尾に「このフラハント農業論の第二版は、私が予定していたほど増補されていないが、それはサー・リチャード・ウェストンから何物かを期待していたのに、それが得られなかったからである。」と記している。これは同年にハートリブによって刊行された

『遺言』第二版のウェストンの序の末尾の注記にいうブラバント農業論の増訂第二版に当ると考えられるから、『遺言』第二版のいくらかあとに本書が刊行されたものと推定される。なお、この巻末にあるウェストン宛のハートリブの書簡二通については、さきにフノセルが無断で引用した記述そのままである。

その他にも、タークスの記述は、ほとんどフノセルが利用しているが、なぜか初版・第二版の献辞および序文については意識的にふれていない。さらに奇妙なことは、タークスは初版の頁数を明記しているのを、フノセルはこれを意識的に伏せていることである。

かくて、タークスの記しているウェストンの原著の初版は、刊行年次が1605とある誤植本であり、その巻頭にハートリブの献辞があり、またサフタイトルは前述の括弧内の末尾にCommon-wealthで終るものであること、ここで注意を留めておきたい。なお、初版の書名は前述のタークスの正確な記述通りDiscoursとなっており、サフタイトル中のwonderfullという綴りも第二版と異なっている。しかし、フノセルは同じ誤植本について、そのサフタイトルの括弧内を削ったCommon-wealthを含まない書名を掲げている。なお、アーンルのウェストンに関する記述は、前述のごとくであるが、その大著の付録にある農書リスト“Selected List of Agricultural Wri-

gers down to 1700 before the invention of printing”には、同じ 1605 とある誤植本を挙げ、タークスと全く同じ書名および発行所を記してある。<sup>(4)</sup>

次に、フノセルに先んずる今世紀のイギリス古農書文献史上の権威とされるドナルド・マクトナルド Donald McDonald のウェストン考証についてみてみよう。彼の一九〇八年刊行の名著 *Agricultural Writers* に依ると、ウェストンの項には、前に掲げておいた引用句に続いて、主として彼の経歴を述べているが、ハートリブの項には、ウェストンの原著はハートリブによって一六四五年に刊行されたと確言している。その書名は、巻末の文献リストによると、一六四五年の刊行農書の中に、次のことく記されている。<sup>(5)</sup>

*Discourse of Husbandry used in Brabant and Flanders, shewing wonderful Improvement of Land there, London, 4to. And again in 1655*

これには刊行所および献辞等については記していないが、題名の *Discourse* およびサブタイトル等も異なるので、或は誤植本とは別の刊行書ではないかという疑いもたれる。

ところで、このマクトナルドの著書の特徴は、著述家毎に、その代表作のタイトルページの写真版を掲げていることであるが、ウェストンの原著のそれは掲載されていない。次のハート

リブの項には『遺言』の初版（一六五一年）のタイトルページを掲げ、それに続いて見開き二ページにサムエル・ハートリブの *A Discourse of Flanders Husbandry* とした本文（五二〜五三ページ）の写真版を掲げている。<sup>(6)</sup> しかし、この本文の内容は一見して『遺言』の長文書簡の一部（第二版では四〇〜四一ページ、第三版では四一〜四三ページに当る）にすぎず、ウェストンの原著ではない。しかし、彼が「一六四五年に *A Discourse of Flanders Husbandry* の初版が刊行され、一六五一年には、彼の『遺言』つまり *discourse* の増補が現われた」と述べていることから、実質的に両書を内容的に同一視していることは明らかである。<sup>(7)</sup>

かくて、マクトナルドも、ウェストンの原著を突見していないことは確かであるが、ウェストンに関する功績・経歴等についてのかなり詳細な記述——それは大部分アーンルによって利用されている——は、何に基づいたものかその出典をつきとめ得なかつたが、その文献的な考証は、ウェストン同名異人のリチャード・ウェストン Richard Weston（以下、両者の区別するために、こちらを R・ウェストンと記す）によることが発見される。概して、マクトナルドの文献的考証は、この R・ウェストンの考証を踏襲したものが多く、しかも、その記述をそのまま無断で引用している箇所が少なくない。<sup>(注)</sup>

〔注〕 サリー・ウェストンと同名異人のリチャード・ウェストン Richard Weston は、フノセルがイギリスにおける農書の完全なリストの最初の編纂者として高く評価してゐる。それが彼の *Tracts on Practical Agriculture and Gardening* (初版一七六九年、第二版一七七三年) の付録としてつけられた “A Complete Chronological Catalogue of English Authors of Agriculture, Gardening, etc.” である。これにはいわゆる農耕 (husbandry) の範囲の農書のみでなく、園芸および植物 (本草学を含む) 等の自然科学的なものを含め、一五二一—一七六九年間の刊行年次別に、著書名を列記してあり、その中の主要な著者に関する解説をも挿入している。マクドナルドは、前記の著者の序文に参考書としてこの R・ウェストンの正式の姓名を挙げずに単に Weston's "Authors of Husbandry" とのみ記しているが、マクドナルドの著者別の解説には、この記述をそのまま引用している部分が見られる。この R・ウェストンの解説の大部分も、後述するウォルター・ハートからの引用によるものである。ここで、文献史的問題として一言付け加えておきたい。それは、フノセルによれば、この R・ウェストンの農書カタログは、前掲の著書の第二版 (一七七三年) に

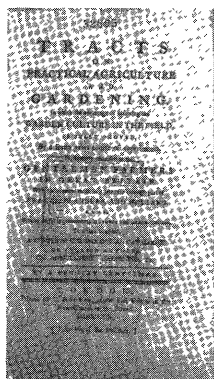


写真 3 R.Weston の *Tracts* の初版 (1769) のタイトルページ

はじめて追加されたものとし、初版にはないことを断っている点である。

フノセルは、わざわざ第二版のタイトルページの写真を掲げて、そのサブタイトル中に、このカタログの付録のある旨の付記のあることを示そうとしているが、これは彼の独断的な誤解であることは、初版のタイトルページを見れば明らかである。この初版は匿名で *A Country Gentleman* となっているが、このような例は、一七一一八世紀頃の農書には、アーサー・ヤングの有名な *Farmer's Kalendar* の初版 (一七七一一年) が *an experienced Farmer* となっているごとく、幾多の事例がある。

その著しい例が、さきに引用したウェストンの評価が『科学紀要』で認められたという一文である。このマクドナルドの引

用はほとんどそのままであるが、さきに指摘しておいたように、その中の字句に重大な修正が加えられていることである。ここでそれを曝露すれば、マクトナルドの前掲の傍点を付した「彼の論文において与えられた勧告 (recommendation)」は、R・ウェストンの原文では「彼の小論文 (little treatise) で与えられた指図 (directions)<sup>(1)</sup>」となつてゐることである。この後者の修正は、ほんらいこの原著が息子たちに遺言として書き残さそうとした手記であるから、あくまで私的な農場経営上の指図であるのを、マクトナルドはこれに気がつかずに一般的な農業改良のための勧告と考えたか、或はそれを知つてそのようにみせようとした意図による修正とも推察されるが、明らかに作爲的な修正は前者の小論文から「小」を削つたことである。これはさきにフンセルがダークスに依拠しながら、その頁数を削つたことと共通した作爲とみられるのである。それは、マクトナルドが依拠したR・ウェストンの農書カタクロクにも、その頁数が明記されてゐるのであつて、それは次のごときものである。

サー・リチャードロウウェストンのプラバンドおよびフランターズ農業論、二四ページ、四ツ折判、ハートトリブによる書簡体の献辞、一六四五年

Sir Richard Weston's Discourse on Husbandry of Prabant and Flanders, 24 pages, 4to the opistle delictatory

by Haruh, 1645

これに相応したタークスの前記の初版 (誤植本) は、同じ四ツ折判で、ハートトリブの献辞が三葉で、本文は二六ページと記されている。<sup>(11)</sup>この両者の本文のページ数には若干の差異があるが、きわめて薄いパンフレットであることは明白である。しかるに、フンセルもマクトナルドも、いずれもこのことを知つていたにもかかわらず、前者はタークスの記述から頁数のみを意識的に削り、後者は頁数を伏せるのみか、ウェストンからの引用文の中の「小」論文をも加工してゐるのである。

この両人の作爲的な修正の動機を、はじめはかかる劃期的な著書が僅か二〇数ページのものであるにもかかわらず、それを実見してないため、その具体的内容を知りえないことを秘する処置として、かえつて内容豊富な大著のごとく思わせようとしたものかと推測してみた。ところがふと、その作爲の動機は、フンセルの短い一節から推理できることに気がついた。それはフンセルがハートトリブの最も有名な刊行書として『遺言』を挙げたあとに続く次のことき記述である。

「これ『遺言』は、その書名の示すごとく、一六五〇年にハートトリブによつてはじめて刊行されたウェストンの論文 (Discours) の増補 (expansion) であるが、その論文の内容の全部は、最初の三、六、七ページにあり、そのあとに後述す

るチャイルドの長文の書簡および他の書簡類で補ったものである。<sup>(12)</sup> (傍点引用者)

この最初の三ページの部分について、フノセルは何も説明しないので、一般読者にはどういう部分か了解し難いであろうが、これは『遺言』の巻頭にあるウエストンの書簡体の序文を指していることは明らかである。しかし、その内容は後でも述べるように、あくまで息子たちに遺言として残す本論に対する序であり、これにフノセルのいうごとく内容全部が含まれているとは、常識的にも考えられない。しかも、『遺言』の原物は、現在でもかなり残存しているから、フノセルはそこを曖昧にするために、単に最初の三ページとのみ記しているとしたか考えられないのである。これは、フノセルがウエストンの原著を見せずに、『遺言』という書名と、そのサブタイトルによる原著の増補という表現にまどわされながらも、『遺言』の内容がチャイルドの長文書簡であることを認めないわけにはいかなから、やむなくウエストンの序文のみを原著とみなさざるをえなかったものと推論される。いなむしろ、フノセルは序文の三ページが原書の内容の全部を示すものでないことを承知で、逆に原書の二〇数ページの大きさを伏せることによって、その矛盾を意識的に隠蔽しようとしたものと解さざるをえない。

マクドナルトの作爲的修正には、このような解釈は付されて

いないが、結局は同巧異曲であり、ハートリプの『遺言』を原書の増補として認めざるをえないための措置でしかないと考えられるのである。

かくて、イギリス古農書に関する最高權威とされるフノセルおよびマクドナルドにして、ウエストンの原著に関する考証はきわめて粗雑であり、かえってその粗雑さを隠蔽するための作爲的な工作を施していることは、当然非難されて然るべきであろう。

そこで、われわれは、新たに考証の糸口を求めてゆかねければならない。それには、いまふれたR・ウエストンが手がかりになる。このR・ウエストンの古農書のカタログ中の記述には、その参考文献・出典を明記してないが、それは多分に、このカタログを収めた前掲著書(初版)の五年前の一七六四年に刊行されたウォルター・ハート・ワター・ヘアの *Essays on Husbandry, 1764* に依拠していることが判明する。ハートは古農書に関して該博な知識をもち、同時に良心的な考証家であることは、本書をみれば納得できる。彼は、主要な農業者述家の略歴・業績および刊行書等について、主として脚注において、簡潔な優れた考証を記しているのである。前述のごとく、R・ウエストンは、これらの記述をほとんどそのまま利用していることは、両書を綿密に照合すれば、容易に看破できる。



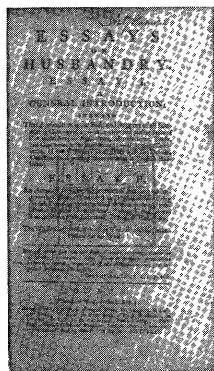


写真4 HarteのEssaysの初版(1764)のタイトルページ

ハートの著書には二つの論文を収めているが、その第二論文の中で、後で引用するウェストンに関する本文の脚注に、その出典として *Discourse on Flanders Husbandry*, 4to, 1645 を挙げ、そこでウェストンの略歴を記したあと、次のごとく述べている。

「彼のフランダーズ農業論は一六四五年に(当時その筆者が誰かを知らなかった)、ハートリブによって刊行されたもので、四ツ折判で、およそ二四ページである。彼の息子たちへの遺言(legacy)は、彼等の農場の栽培について述べたもので、四ツ折判三ページより成り、一六四五年に死の床(death bed)で書かれたものである。…この論文(Discourse)は、ずっと農業における最高の業績の一つとして尊敬されてきた。」

これに続いて、前掲のR・ウェストンを経て、マクドナルトが孫引している『科学紀要』でのウェストンの評価云々の一節が出てくるのである。

R・ウェストンは、このハートの記したウェストンの略歴以下の記述全部を引用しているのであるが、その前に出ているウェストンの原著については、前述のごとく、とくに頁数の二四ページを二六ページに変え、またその冒頭に「ハートリブの書簡体献辞(epistle dedicatory)」があることを付加している。

ここでの疑問は、ハートおよびR・ウェストンがデータクスと同じ誤植本によって、その刊行年次を一六四五年と推定して記入したのか、或は誤植本でない別の一六四五年の刊行書があったかどうか、また別本とすれば、それにもR・ウェストンの追加したときハートリブの献辞が誤植本と同じように付けられているかどうか、である。この疑問は、ハートの著書の別の箇所で解決しうる材料を発見できるのである。第一論文の本文に「農業はすべての真の基礎である」と述べてある脚注に、「サー・ウェストンのプラバントおよびフランダーズ農業論(Sir Richard Weston's discourse on the husbandry of Brabant and Flanders) 四ツ折判、一六五五年の前文のハートリブの書簡体の献辞」の四、五ページからの引用として「農業が Common-wealth に属する最も貴重にして必要な産業部門

の一つである。すなわちひとびとの間の相互交易の第一の基礎であり、且つすべての秩序ある社会における富の源泉である」という一節を掲げているからである。これは、すでに掲げたごとく、ダークスの対象とした誤植本のハートリプの献辞の中から引用している一節と全く一致する。つまり、ハートは、ここでは、ダークスと同じ誤植本を対象として取りあげており、その誤植年次の1650の0を簡単に年代に合わせて0に変えたものと推定されるのである。これにはハートは頁数を記していないが、ダークスによれば、献辞が三葉、本文が二六ページのもものと確認しうる。

しかるに、ハートがウェストンの略歴等を記した前述の脚注で対象としたウェストンの原著は、ハートリプの献辞を除いており、頁数を約二四ページとし、その刊行年次をこの一六四五年と区別した一六四五年と明記している。それは、確かにダークスの誤植本とは別本であり、一六四五年に刊行された最初のものであることが推論されるのである。しかして、この方の書には、ハートリプの献辞でなく、ウェストンの息子たちへの遺書の書簡体の序文三葉がついていたと推定される。

そのことは、ハートリプの『遺言』第二版（一六五二年）の冒頭につけられたウェストンの遺書の序の末尾に付せられた注記に「これまでがサー・リチャード・ウェストンのフラハント

農業論の序文、これは近く増訂した第二版として刊行の予定」とあることからも裏書きされる。このウェストンの序文のあるものを仮にウエストン本と呼ぶとすれば、このウエストン本こそが正しく一七四五年に刊行された最初の原書であり、これはハートのみが確認したと考えられる以外には、これを実見したと思われる著書は見当らない。おそらくイギリスでも、現在消失した書（vanished book）と推定される。また、このウエストン本の増訂第二版は、ついに刊行されずに終わったと考えられる。このウエストン本に対し、ハートリプの献辞の付したものを仮にハートリプ本と呼ぶとすれば、その初版は前記の誤植本がこれである。このハートリプ本が、R・ウェストン、ダークス、マクドナルト、アーンル、フンセル等の一般にとりあげている書であり、その現物を実見したとみられるのは、当面ハート、ダークスおよびR・ウェストンの三者を確認しうるのである。他は彼等からの孫引的な引用を除けば、大部分ハートリプの『遺書』と同一視していることは、すでに指摘したごとくである。

このハートリプ本の誤植年次をハートの一六四五年を例外とすれば、一六四五年説と一六五〇年説の両説があることはすでに述べたが、一六四五年説は歴史がこれを容易に否認する。それはハートリプ本の冒頭の献辞は、前に述べたごとく國務会議

(Council of State) に捧げられたものであるが、この國務會議とは一六四九年のクロムウエルの市民革命によつて、従來の上院を廢止して設置された最高行政機關であり、その設置とともに王制から共和政体の Common wealth となつた歴史的事実から、一六四五年説はとうてい成立し難い。ハートリブ自身は共和制政府のもつて、クロムウエルの農業振興に貢献した功として年金千ポンドが与えられたとされているから、ハートリブが、既刊のウェストンの原著を利用して、ウェストンの序を共和政体の最高機關に対する自分の御世辭たゞふりな献辭に変えて刊行したと想定することも、強がち無理な臆測ではないであらう。さらに、これに関連して、原著のサフタイトルに末尾の Common-wealth の一節を付加したのは、このハートリブ本からであり、最初のウェストン本にはこの一節を欠いていたと推定されるのである。Common wealth の用語は、一般の普通名詞として一七世紀のマークム Markham 等の書名のサフタイトルや本文中にもしばしば用いられているが、ここでは、それをハートリブの献辭中にある革命後成立した共和国 (Republic) と同義語的に用いられていることは明らかである。このサフタイトルの and でむすぶつげ方にも、いかにもあとで付加した形跡がみられる。なお、このハートリブ本を積極的に一六五〇年刊行と推定しよう一つの材料として、『遺書』の長

文書簡に付随したハートリブ宛の小書簡のうち、一六五〇年一月二八日付の阿姆斯特ダムからの匿名書簡(第三版で C・O とする)<sup>(16)</sup>で、その冒頭にフランド農業論 (Discourse of Brabant Husbandry) の送付を受けた謝礼の言葉がみられることである。ハートリブ本の第二版は、一六五二年に初版と同じ刊行所から小型四ツ折判として刊行されたことは、ダークスの記述を信用してよいと考えられる。しかし、他にその実物を確認して、それにふれている農書には、見当らない。

以上の考証により、ウェストンの原著には、ウェストンの遺言の序を付したいわゆるウェストン本とハートリブの献辭を付したいわゆるハートリブ本の二種類があり、その書名および刊行年次は、次のごとく推定される。<sup>(註)</sup>

〔ウェストン本〕 A Discourse of Husbandrie used in Brabant and Flanders, shewing the wonderful improvement of land there 1645, 4to

〔ハートリブ本〕 A Discourse of Husbandrie used in Brabant and Flanders, shewing the wonderful improvement of land there; and shewing as a pattern for our practice in the Common-wealth, 1st edition 1650, 4to, 2nd edition 1652, small 4to

〔註〕 フランク・パーキンス W. Frank Perkins の有名なイギリス古書書目録 *Brush and Irish Writers on Agriculture, 1929* に掲げる著者別の農書リストによる。ウェストンとハートリブの項に、この問題の書に「*ホ*」それぞれ次のごとく区別した記載がある。

**Weston, Sir Richard**

A discourse of husbandrie used in Brabant and Flanders 1645, 1650, 1652 4to (See Hartlib)

(Re-issued as) A treatise concerning the husbandry and natural history of England 1742, 1744

**Hartlib, Samuel**

A Discourse of Husbandrie used in Brabant and Flanders shewing the wonderful improvement of land there, and serving as a pattern for our practice in this Common-Wealth, 1st edition 1650, 2nd edition 1652, sm 4to (See, Reeve, Gabriel)

これによると、パーキンスは書名の上で、「*ら*」をゆるウエストン本とハートリブ本を区別し、しかもウェストン本の初版を一六四五年としている点は注目される。しかし、次の一六五〇年、一六五二年の刊行年次はハートリブ本と混同している。また、ウェストン本は四ツ折判、

ハートリブ本は小型四ツ折判と区別しているのはおかしい。彼が果してウェストン本とハートリブ本とが異本であることを正確に考証した上で記載であるかどうかは疑問である。そのことは、ハートリブの方の注記に、この初版は *Martyn's Miller's Dictionary* (これはおおよそ *Philip Miller* の *Gardener's Dictionary, 1724* を指すと思われる) に *ホ* と「一六四五年にウェストンの了解なしに、ハートリブによって刊行された」とし、第二版の序文にはウェストンの息子たちへの書簡とハートリブから第二版の刊行の認可をウェストンに依頼する二通の書簡が付されていると記している。ここから第二版とは、一六五〇年刊のハートリブ本に当ると思われるが、ハートリブの二通の書簡の付されているのは明らかに一六五二年刊のハートリブ本の第二版である。しかも、それにはウェストンの書簡体の遺言の序が付いているわけがない。そのことはすでに、論証したところである。またハートリブ本の初版は四ツ折判のはずである。

これに関連して、ハートリブの『遺言』*Legacie* の刊行の経緯について一言すれば、それがウェストンの原著とは内容的に別物であることは前述のごとくであるが、ハートリブはウェストンの原著の刊行後に、新たに入手したチャイルドのイギリス

ス農業の欠陥とその矯正法に關する長文書簡を、時宜を得たものとして刊行しようとするに際し、すでに刊行したウェストンの原著の反響をも利用しようとして、ウェストンの遺言の序を用いて目的な『遺言』なる書名を選び、サフタイトルにあたかもウェストンの原著の増補版のごとき表現を用いて刊行した。ところが、その策が当たるとみえて、その翌年第二版を再刊することになったが、これと並行してウェストンの原著のいわゆるハートリブ本をも同年少しおくれて刊行した、と推定してみたい。このあと、ウェストンの原著に基づくハートリブ本はウェストンの承諾が得られないためこの第二版で終りとし、『遺言』の方は新たなヒーチ博士等の書簡等を増補して第三版として刊行しようとした。この際に単に『遺言』なる書名のみを残し、サフタイトルを改変し、ウェストンの遺言の序文を削って、秘かにウェストンから離脱した形で刊行されたのである。ハートリブのウェストンの原著の刊行を、アーンルがハ剽窃的 (practically) と呼んだのは当然であるが、このような剽窃的刊行によって、当時の好論文のいくつかが後世に残せられることになった功績は、事後的には認めねばならない。

ここで、ウェストンの原著の覆刻本に關する若干の考証をつけ加えておこう。

《ノート》 リチャード・ウェストン『ブラバントおよびフランダース農業論』考

まず、リチャード・ウェストンの名を冠した A Treatise concerning the husbandry and natural history of England が一七四二年に刊行されていることである。イギリス古農書の書誌的権威パーキンスのカタログには、ウェストンの項で、これをいわゆるウェストン本の覆刻としているが、これはすでに述べたハートは、約二〇年前に刊行されたこの書がハートリブの『遺言』の「貧弱な抄録」(poor abridgement) にすぎないと述べており、R・ウェストンの農書カタログの注記にも、その言葉が、そのまま引用されている<sup>(18)</sup>。しかるに、早くもこのハートの正しい考証があるにもかかわらず、近年に至って、ガルニエのごときは、その著書に冠したウェストンの名にまどわされて、その中の記述をウェストンのものとして利用しているのは、前述のごとくである。

また、最近フノセルがウェストンの原著の覆刻本として、一七二六年に刊行されたという次の書を挙げている。<sup>(20)</sup>

The Gentleman farmer; or, certain observations made by an English gentleman upon the husbandry of Farmers, and the same compared with that of England.

これはロサムステッドの試験場にコピーが現存してと述べているから、ウェストンの原著と照合すれば正しい覆刻本か否かを直ちに判定できるが、フノセルが、それを行なったと思われる

ないから、おそらく書名からの類推ではないかと想像される。

ちなみに、パーキンスの著書では、匿名書のリストの中に、「この書名をかかげており、その著者をロジャー・リバーズ Roger North と指定していることから、覆刻本とは考えられない。

まさしくウェストンの原著の覆刻とみられるのは、パーキンスが、ハートリブの項で覆刻書としている方の、ガブリエル・リーフ Gabriel Reeve によって、一六七〇年に刊行された次の一書である。

Directions left by a Gentleman to his Sons, for the Improvement of Barren and Heathy Land in England and Wales

この書について、アーンルは、この大部分をウェストンの原著の模写としている。また、フノセルによると、四ツ折判本であり、「これは明らかに新刊書のごとくみせて刊行されたウェストンの論文以外の何物でもない。ただ序文のみが事実新しいもので、それにはガブリエル・リーフの署名がある」と述べている。マクドナルドの前掲書中にその書のタイトルページの写真版が掲げられているから、これが現存していることは確かである。しかるに、マクドナルドは、ウェストンの原著との関係に全然気づかずに、リーフ自身の著述として、その短い概要を紹介している<sup>(24)</sup>。けたし、その概要の内容からみて、ウェストン

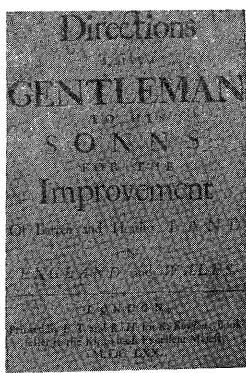


写真5 Reeve の名で刊行された Weston の Discourse の覆刻本 (1670)

の原著の覆刻であることは、ほぼ間違いないと推察される。とすれば、この現存するリーフの名の著書が、ウェストンの原著の内容を知りうる貴重な材料となる。<sup>(注)</sup>

〔注〕 R・ウェストンの農書カタログの中にも、次のこときほぼ同じ書名を挙げて、これをウェストンの著としている。

Directions left by a Gentleman to his Sons, for the improvement for barren lands, by Sir Richard Weston, 4to 1665

これは恐らくリーフの刊行のものと考えられるが、これをウェストンの原著（ハートリブ本）を実見したと思われる R・ウェストンの認定としてかなり信用をおきう

る。ただし、その刊行年次は一六七〇年の見誤りであろう。  
この書には博識なハートはなんらふれていないし、  
た一八世紀初頭に刊行されたイギリス最初の農業百科事  
典 *Dictionarium Rusticum, Urbanicum, Botanicum,*  
1704 の巻頭にもある参考書として、『フランシス・ディクス  
の別個に *Gab. Rive of Improving Barren and Heathy  
Lands* なる書名を掲げている。なお、ガセリヒの訳語  
文では、これをリーフの独自の著書とみなしている。

Walker of Henry to Arthur Young, 1200 1800, 1908,

pp 262~3

(6) *ibid.*, pp 70~71

(7) *ibid.*, p 65

(8) Fussel, *op. cit.*, p 85

(9) *ibid.*, pp 80~81

(10) Richard Weston, *Tracts on Practical Agriculture  
and Gardening*, 1769, (Appendix) a Catalogue of  
English Authors, p 15

(11) Dircks, *op cit* p. 64

(12) Fussel, *op cit.* pp. 41~42

(13) Walter Harte, *Essays on Husbandry*, 1764,

*Essay II*, p 53, footnote

(14) *ibid.*, *Essay I*, p. 22, footnote.

(15) Harte, *op cit* *Essay II*, p. 64 R Weston, *op. cit*  
*Catalogue*, p. 16

(16) Harthb, *Legacy* 3rd ed p. 103

(17) Ernie, *op cit* p. 477

(18) Harte, *op. cit.* *Essay II*, p. 54

(19) R Weston, *op cit.* *Catalogue*, p. 49

(20) Fussel, *op cit* p. 115

以上、わたくしの探索したかぎりの材料から、ウェスタンの  
原著の文献的著証を終るが、次にこの書の成立の経緯とその内  
容に関して、多分に推理的な考察を述べようとする。

(1) G. E. Fussel, *The Old English Farming Books*  
from Fitzherbert to Tull (1523 to 1730), 1947, p 42

(2) Lord Ernie, *English Farming: Past and Present*,  
new edition, 1961, Introduction Part One, before  
1815 by G. E. Fussel *ibid.*

(3) H. Dircks, *A Biographical Memoir of Samuel*  
*Harthb*, 1865, pp. 62~65

(4) Ernie, *op. cit* p 477

(5) Donald McDonald, *Agricultural Writers*, from Sir

- (21) W. Frank Perkins, *Brush and Irish Writers on Agriculture*, 1929, p. 184  
 (22) Ernie, *op. cit.* p. 479  
 (23) Fussel, *op. cit.* p. 44  
 (24) McDonald, *op. cit.* p. 107

五

ウエストンの原著は、その書名の示すように、フラハントおよびフランタースの農業に関する知識をもとにして、息子たちのために誌した手記 (manuscript) である。ウエストンが海外で、彼地の農業を實際に観察したことは、その行文中のアントワーブ付近での見聞を記している言葉が、断片的に伝えられているところからも、ほとんど確定的といって差支えないであろう。この場合、ウエストンの海外での見聞を、一七世紀の内乱 (civil war) 期における王党派の亡命と結びつける見方が現在かなり広く信じられている。しかし、ウエストンの亡命説と帰国後の手記執筆との間には、明らかな時代錯誤があり、当然内乱前の海外旅行説が採られなければならない。<sup>(注)</sup>

(注) ウエストンがカトリック教徒の王党派員 (royalist) で、

クロムウエルのピューリタン革命前期の内乱勃発 (一六四二年) の頃、倉外に亡命した多くの王党派の一人とし

て、現在のベルギーの一部のフランタース (フランドル) 地方に一時定住して、その地方の進んだ農業を観察し、王政復古 (一六六〇年) 後に帰国してから、その観察から得た知識によって手記を執筆したとする解釈は、イギリス農業史家のアーナルやフランクリン等の著書<sup>(1)</sup>に散見され、有名なブリタニカにさえ、ウエストンの亡命説を採用している。しかし、その手記が内乱のさなかの一六四五年に自家の病床で執筆され、ハートリブによって刊行されたということは、時代錯誤も甚だしい。この執筆時を誤植本の推定刊行年次の一六五〇年にまでくり下げても、最も厳しいクロムウエルの独裁政治のときに当り、それまでに亡命者が帰国したとは考えられない。しかも、アーナルやブリタニカでも、ウエストンがアントワープ付近で、その農業から貴重な教訓を学んだのは一六四四年であると記しているから、彼が帰国したとすれば、手記執筆から考えて、その年か翌年の一六四五年、つまり内乱の激化する以前でなければならない。

このようなウエストンの亡命説は、かなり古くからあったようで、たとえばすでに一八世紀前期に、タルの論敵であるスウィツァー Stephen Switzer は、この亡命説をとっているが、その当時にはさすがに帰国後の執筆と



いう時代錯誤を少ししていない代りに、亡命先から母国の友人(への)書簡をもつてウェストンの原著の材料とみなしている。<sup>(4)</sup>これは、当時の亡命者であったロック John Locke が亡命先のオランダから友人宛の書簡を基にして有名なロノク教育論が成った例などからの類推とも考えられようが、スウィンナーの場合は前述のごとく、ハートリブの『遺言』と混同しており、その長文書簡をウェストンのものと見誤った上での推測であろう。

かくてウェストンの亡命説が否認される以上、彼は内乱以前に外遊したことになるが、これに関連する彼の経歴は必ずしも明白ではない。その外遊の事情はR・ウェストンが記述しており、これはさらにハートからの引用である。有名なラウドンの『農業百科事典』中のウェストンの略歴にも、亡命説でなく、このハートまたはR・ウェストンからの記述が採用されている。いま、マクドナルドによる略歴を引用しておく。<sup>(5)</sup>

「彼は *Sury* の *Sutton* のナイト、リチャード・ウェストンの長男で、その出生の年月日は確かでないが、一六一三年に *Sutton* の教区にある父の所領(estate)を相続し、一六二二年七月二日に *Guildford* のナイトに叙せられた。或る著者たちの確言するところでは、彼はジェームズ一

世(在位一六〇三—一六二五)から *Palatine* 選帝候(elector)兼 *Bohemia* 国王フレデリック一世への特使(ambassador)となり、また有名な *Prague* の戦後に従事した……」。

この中の或る著者たちというのは、直接にはR・ウェストンを指し、延いてはハートをも含むと考えてよいが、ハートの原文では、ウェストンの特使となつたのは一六一九年としてゐるから、一六一三年に父の所領(農場)を相続してこの外遊まで農業を体験したとみても僅か七年間であり、外遊前の前記「三〇年間の農業経験」云々の言葉は、ウェストン自身の記述かどうか疑問がもたれる。なおウェストンの死去は、マクドナルドは一六五二年としてゐるか、それはおそらく、タークスによつて、ハートリブ本第二版に付せられたハートリブのウェストン宛(書簡)の日時から推定したものと思われる。

さて、ウェストンの原著の内容について推理することになつたが、その本文を具体的に知る材料は、探索した農書からは断片的にしかな得られなかつたとしても、その最初のいわゆるウェストン本には、その冒頭に息子たちに、この手記を残す遺言の形式の序文三葉が付されており、それがハートリブの『遺言』の第一版および第二版の序に利用されていることが判明したか

ら、まず、その序によって、手記がいかなる内容を書き残さそうとしたかを知ることができよう。その序のはじめに、おそろくハートリプの手による次のごとき標題がつけられている。

「サリー州サントンの故リチャード・ウェストンの息子たちへの遺言、一六四五年」

この遺言の冒頭には「余は遺言として、この以下の短い論文 (treatise) を遺す。余自身がお前達に、(ここに記されたことを) 実例をもって示すことによって、はるかに多くの戒律 (regula) を訓えるのには、もはや余命はないが、しかもなお死に顔した一人の父親がこれまで見知した事柄と、異議を挟む余地のない実見によって得た知識とを、その息子たちに訓えんとする戒律は、少なくともその父親が正当と考えたことを記したものであると信せしむるに足るだけの感銘を与えるであろうと確信する」という一節に続いて、このように誌るしている。

「この論述 (Discourse) の全部は、イングランドでは実行されていないが、ブラバントやフランダースの一部の地方では、ここでの大麦やライ麦の耕作のように一般的に行なわれているような方法や手段によって、不毛の、ヒース地 (barren and heathy land) の改良法と、それによって遙かに普通以上の利潤をあげうる方法を、お前達に示したものである。その諸手段によって、お前達が自分らの農場を

大いに拡張することが可能となり、またお前達が一層精励することによって、どれだけ自分たちの仕事を処理するかに応じて益々多くの利益と賞識を受けるであろうし、また近隣のひとびとがお前達の労働によって、永年耕作されずに放置されていた不毛のヒース地を、この王国のどこにもあるような放牧地と採草地の付属した好適な耕地に転換することに成功するのを見れば、彼等から模倣されるばかりでなく、尊敬をうけるであろう。(傍点―引用者)

この改良法の効果については、次のように述べている。

「従来いかなる技術または科学も、この以下に述べる論述の説明するような多大の利益を挙げる方法を着想したことは(鍊金術師のごときを除いては) 他になかったのである。金貸しでも、七年間に複利で元金を倍にしうるにすぎないが、この小論述によって、お前達は直ちに、一年間に元金を三倍以上になしうることを知るであろう。」

以上によって、ウェストンの手記の内容は、主として、不毛のヒース地の改良法を説こうとしたもので、それは短かい論文であることを物語っている。これからみて、前述のリーフ (Leaf) の一七七〇年の刊行書は、この内容をサブタイトルで明記した覆刻本であることが推察される。マクトナルドは、前述のごとく、リーフ自身の著作と見誤っているが、この書の

概要を次のごとく記している。

「彼は三〇年間農業を営み、多くの土地を改良し、そのあとフラバントとフランダースへ出かけて、そこで学ぶべき新しい課題 (Lesson) を実見した。彼は主としてクロールバとカフについて、また一エーカーを一ポンドでできる土地の Devonshung (削土 paring とその燃焼 burning) について述べている。粘土・壤土および泥灰土を肥料として推薦し、また深耕と多肥とを奨めていた。」<sup>(6)</sup>

これがウェストンの手記の概要を示すものであっても、ウェストンの名を不朽ならしめたクロールバの耕地への導入・栽培方法については、なにもふれてない。ウェストンのクロールバについての断片的な言葉は数種の農書の中に散見しているが、その一貫した栽培体系について記されたものは見当らない。だが、唯一つの手懸りは、さきにご注意しておいたウェストンとはほぼ同時代人であるワリーリッジ John Worlidge (一六四〇—一七〇〇年) の有名な *Systema Agriculturae* の中にみられる前掲の三つの引用句である。これは出典を明示してないから、ウェストンの原著からの引用かと思っていたが、この原文が総研で最近入手した『遺言』第三版(一六五五年)の付録の注釈 Annotations upon the Legacy の中に発見できるのである。これは、僅か二頁のものであるから、手記の全文でないことは明らかであるが、

クロールバ栽培法を要約的に記したものである。これは、多分ハートリプが『遺言』第二版のウェストンの遺言の序の末尾に付記してあるより、完全な手記のコピーによる増補第二版の意図が実現できなかったことから、この刊行を断念した代りに、『遺言』の第三版の付録の中に、ウェストンの原著のクロールバ栽培法の要旨を摘録して挿入したものと推察される。ワリーリッジは、この『遺言』第三版を利用しているから、この挿入の記述から引用したことは確かである。そのことは、多くの農書に精通していたとみられるワリーリッジにして、すでにその当時にはウェストンの原著自体は容易に実見できないものであったことが裏書きされよう。ともかく、この重要な記述を仮訳して、次に掲げることにしてしよう。<sup>(7)</sup>

サー・チャートリウエストンのクロールバの最良の管理に関する特別な指図 (Sir Richard Westons more special directions for the best ordering of Clover-grasse)

クロールバ種子は最も不良な不毛土壤に播いた場合、最もよく成長する。われわれの最も不良なヒース地のことき土地は、インクラントに存在している。

かかる土地には、次のことき播種の準備がなされるべき

である。

まず最初に、ヒースを削りとって、次にそれを小山に積みあげよ。一ロッド (Rod) または一ポール (Pole) の土地から削り取ったもので一五・五呎の小山ができる。この小山の積上げの準備が終ると(その作業をわれわれは Devonshire と呼んでいる)、それに火をつけて燃焼させて灰にする。それから、各小山の灰に一ペノク (Peck) の砕かないままの石灰を投げこんで、その石灰が灰でまみさるようにしておいて、降雨によって、その石灰が砕けるまで、そのままにしておかねばならない。そのあとで、石灰と灰とをよく混合させてから、それをその土地一面に拡ろげよ。

これがすむと、降雨に遇ったときか、または降雨の直後のいずれかに、犁耕して播種するのであるが、耕深が四インチ以上ならぬようにし、また鋤き溝 (Tarrow) ができないように、できるだけ平坦にすべきであるが、さらに平坦にするためには、その後でハローの下に小枝をつけて、「いわゆる bush harrow」ハローかけをする。

このように準備された土地には播種できるか、一エーカーの土地に、クローハの種子は、容量にして大体二分の一ペノクよりやや多い目の約一〇ホントが播ける。その播種

の適期は、四月もしくは三月下旬である。

六月一日頃には刈取できるようになる。それは最も優良な乾草ができる。刈取期間は、鈴ができれば始める時を観察していれば、いっそう確實に知ることができる。その時が適期に当るからである。そして、その年の終りまでに、三回の刈取ができるが、その全部が非常に良質な乾草になる。第三回目の刈取りが終わったあとには、他の土地でもやっているように、冬の間その土地に家畜を放牧してもよい。

しかし、採種するつもりなら、一年に二回の刈取しか期待してはならない。第一回は、前述の指図通りに行なえばよい。しかし、第二回目の成長は、その種子が充実して完熟するまで、そのままにしておいて、それを刈取って、その先端 (top) を打穀し、その種子を保存するが、エーカー当り少なくとも五ブッシェルの種子が得られるであろう。このように種子を脱穀したあとには、長い茎が残るが、これは家畜の飼料になる。しかし、成長しすぎて茎が堅くなった場合には、その茎を煮てどろどろにした粥 (Bran) にすれば、それを食べる豚やその他のどんな家畜にも大いに栄養になる。

採種用の第二回目の刈取りのあとは、その年にはそれ以上刈取りをしてはならない。だが、再び芽を出したときは、

家畜を放牧させる。その一エーカーで、一般の六エーカーに相当する牛を飼養することができ、より豊富な牛乳が得られるであろう。このことから、ひとによっては全く刈取をしないで、毎日放牧するようになる。

一旦播種したら、五年は続けられる。そのときに犁耕すれば、三年または四年間は小麦の豊作が続く、そのあと一作の燕麦の収穫がえられる。

そして、燕麦が充分はじめたら、そこにクローバ種子を播け(それ自身が優れた肥料になるから)。土地に全く新たに施肥(dressing)する必要はない。そして、燕麦を収穫するときまでには、軟らかい牧草が、その下に成長しているのを見出すであろう。もし望むならば、その上にその年中、牛または馬を放牧できるし、その翌年には従来通り数回の収穫が得られる。

以上のウェストンのクローバに関する指図は、Devonshireと呼ぶヒース地のヒースの細根の張りつめた絨壇状の表土を削り取り(paring)、それを堆積して燃焼(burning)した灰を混ぜたものを全面に散布しておいて、その跡にクローバを五年栽培した後、穀物類を五年連作し、再びクローバの牧草地に転換するシステム、いわゆる穀草式に相当する輪換式農法(cover

thle husbandry, alternate husbandry)にほかならない。

この前段のヒース地の開拓方法としての Devonshire という焼土法(burning of land, burn-bating, burn beating)は、<sup>[注]</sup>アーンルのウェストンに関する記述中の八火と水によって『*By Fire and Water*』彼の農場の改良に成功したという、一見、中国古代の火耕水耨的な表現に当るものと考えられるが、これは、古くからインクラントのみでなくフランス等でも行なわれていた方法である。さらに一八世紀の農業革命期までも、かなり重視されていたのである。それは当時の多くの農書にこの方法に関する記述がみられることからも証明される。その方法には若干の地域的差異があり、また 刈り取の農具も paring spade (or shovel), paring-mattock (beating axe) → breast plough → paring plough → 人力用具から畜力農具への発展の過程がみられる。その意味で西欧の農業技術史の上で、案外見残されている興味あるテーマとも考えられる。しかし、この方法はウェストンの創案ではないから、ここでは省略して、改めてとりあげることにした。

〔注〕ここでは、一七〇四年初版のイギリス最初の農業百科事典 *Dictionarium Rusticum, Urbanum and Botanicum, or A Dictionary of Husbandry, Gardening, Commerce, and all Sorts of Country Affairs* ② 中

「穀作のための焼土法」(Burning of Land for Corn)の項目の記述を紹介しよう。その方法を Denshuring と呼び、これに類似のものを Devonshuring または Dan bushuring という述べ、これは次の二つの方法があるとしている。すなわち、通常の方法は breastplough で削り取った芝草と焼いた灰を降雨で濡めしたものを撒く方法であり、いま一つは、本文で述べたように、とくに石灰塊を混じて行なう方法であるという。

ウェストンの論述の特徴は、後半のヒース地の開拓後の作付方式にあるが、この場合の穀物と牧草との定期的交替による輪換方式としての convertible husbandry の創案も、ウェストンに発するわけではなく、すでに一七世紀初期にかなり広く行なわれたとみられる。ウェストンの原著の二五年前に刊行されたマーカム Gervase Markham の Farewell to husbandry, or the enriching of all sorts of barren and sterile grounds in our kingdom は、そのサフタイトルに示すごとく、各種不毛地の改良法を記述したもので、当時かなりの先行をみせたとみえ、一六八四年まで一〇版を重ね、ウェストンの原著の刊行當時にも売れつつあった書であるが、この中にも不良地の改良には石灰の散布を奨め、また土地の種類によるいくつかの輪換式の作付方式を提示している。とくに、ウェストンの場合と同じ

ヒース地の作付順序としては、小麦—小麦—小麦—大麦—燕麦—燕麦—燕麦—白豌豆—牧草—牧草—牧草の一年の循環方式を奨め、これによって牧草の生育も良好であるとは述べている。<sup>(9)</sup>その牧草の種類は具体的に示していないが、この方式では穀物と牧草の比率は約二対一で、大体三圃式の休閑区が牧草栽培区に転化していることになる。しかしながら、穀作の八年連作で果して地力の上で良好な収量を挙げうるかが問題であるが、これと関連してとくに難点となるのは雑草の問題であろう。マーカム自体も、このような作付方式をとった場合の雑草防除を重視しており、当時の撒播方式の段階で、土壌および雑草の種類に応じて効果的な手取除草(hand weeding)のやり方を綿密に述べているのが、本書の大きな特色をなしている。

このように、ヒース地における穀物と牧草の輪換方式は、すでにウェストン以前に提唱されているから、ウェストンの功績は、この栽培牧草にクローハを導入して、これと穀物との間のより高い生産力をもつ輪換方式への推進を創案したことに求められるであろう。前記の引用文にあるように、クローバ区は普通の採草地(common meadow)の六倍の家畜飼料を生産するものとすれば、ウェストンは確かに三圃式農法よりも、より高次の農法段階としての穀草式農法の創唱者となしうるであろう。フツセルがウェストンを、alternate husbandry の真の基礎を

きずいたとなすのは<sup>(10)</sup>、この意味において正當な評価といえよう。

〔注〕 オランダの農業史家バヌ Stcher van Bath は Britain and Netherlands (Papers delivered to Oxford Netherlands Historical Conference) 所収の論文において、ウエストンが一六四四年に Ghent と Antwerp の間の Waes 地方で行なわれているのを見たという作付順序は、次のときもであつたとしている。

亜麻・カブー並麦とクローバー・クローバー・クローバー

この出所として、ウエストンの原著第二版(一六五二年)七ヘーシと記しているが、これはいわゆるハートリブ本の第二版に当るわけで、これを利用した書は、筆者には初見である。ただ、ハスがこの原著を突見したかどうかは疑わしく、またこの作付順序がノーフォーク輪裁式の基礎となつたとみているのは、速断であるう。

このウエストンのクローハ栽培に関する原著の一節が、さきに述べたハートの脚注を付した本文に引用されている<sup>(11)</sup>。これは原著を突見したと認められるハートが出所を明示した引用であるから、原文の一節であることは、ほとんど確かであると考えられる。

「クローハおよび他の牧草類の種子は、単独に、(ALONE)

に播くべきで、春播穀物 (spring corn) といつしよに播いてはならない。つまり、その点ではそれ〔クローハ〕を直接穀物とともに、またはその播種の後で播いているインクランド、ブラハントおよびフランダーズの慣行を変えることである。その理由は、私はハートフォートシャーにおける経験によって、それ〔クローハ〕は初年目には非常によく出来て、その単独で得られる利潤は、それといつしよに播いた場合の燕麥などを合わせた利潤よりも多い。」(一六四五年版、一七七一八頁)

これは、さきのワーリノシも引用しているクローハの単播の説明に該当しているが、これはフランターズ等の方法でなく、ウエストンの経験からの創案のようでもある。

このクローハの栽培に関連し、ウエストンの要めるクローハは一般に輪裁式に用いられる赤クローハ (red clover) と考えられているようであるが、不毛の開拓地に最適な生育を示し、しかも五年間も連作しうる永年性のクローバが、現在のいう赤クローハとはどうい考えられない。当時の農書には赤クローバの名称はみられず、多くは broad clover または great clover の名称が用いられているが、これを直ちに赤クローハとみなしえない。マクドナルトは、その出典を示していないが、ウエストンの導入した種類を  $\wedge$  Zonsuch と呼ばれる牧草  $\vee$  とし、これ

に「その本物は現在の *trifol* として知られているクローバ」と注記しているが、<sup>(13)</sup> 当時の農書では、*nonsuch* はむしろ *great clover* および *great trefoil* と區別して用いているようであるから、<sup>(14)</sup> これが赤クローバの名称とはみなしえない。当時すでに、ウェストンの不毛地でのクローバ栽培法に対して疑義があったことは、ハートリブ『遺言』第三版中のタフリンからの通信に「サー・リチャード・ウェストンは、この農法を不毛地の改良に適用しようとしているが、私の経験と判断によると、その最良の改良は最良の土地でなされるべき」として、不毛地改良のためのクローバの栽培を疑問視している。

ウェストンのいうクローバに関して、敢て素人としての筆者の推理を述べれば、当時の古農書類でクローバの名称のついたものを探索してみると、赤クローバ [*Trifolium pratense*] に似た広葉で大形で、しかも不毛地にも適する永年性のクローバとして、*meadow clover* [*Trifolium medium*] または *cow clover* (或は *cow-grass marsh-grass* などとも呼ばれる) が、これに当るのではないかと類推している。<sup>(15)</sup> 識者の御高教を俟ちたい。

当時の赤クローバの栽培は園地に類する小圃込地 (*croft*) での栽培に限られていたとみられ、耕地への本格的な導入は、輪式農法形成の起動力としての技術革命を経てからであると考

えられるのである。

この小稿の結びに、たまたま R・ウェストンがその著書の序文の中で、ウェストンの原著からの引用——彼が依拠するハートンの著書には見当らない——としている次の興味ある一節を掲げることしよう。

「農業者が、土壌を反転せしめ、かつ雑草を十分に除去することに よつて、園芸家のやり方を倣ねることが適切であると考えることが多いほど、それだけ、彼の作物の質が向上し、かつ一般社会の利益はもとより、特に彼自身の私利を得がより、豊たかになるであろう。」(一六四五年版、四頁)

これは、いわゆる耕地栽培 *field culture* に集約的な園地栽培 *garden culture* の方法の模倣を奨めている点で、構想としては農業近代化につながるが、それが本格的に達成されるのは、一八世紀に入って労働手段の改良・発明による新しい畜力技術体系の確立をまたねばならなかったことは、もはや述べるまでもないことであろう。

注(1) Ernie, op cit pp 107~8

(2) T Bedford Franklin, A History of Agriculture, 1948, p 122

(3) Encyclopaedia Britannica, 1958, Vol I p 358



- (4) Switzer, op. cit. Vol I, Introduction xiv.  
 (5) McDonald, op. cit. p. 67~68  
 (6) *ibid*, p. 107  
 (7) Harthig, Legacy, 3rd ed. pp. 242~243  
 (8) Ernle, op. cit. p. 108  
 (9) Gervase Markham, Farewell to Husbandry, 1620 chap. 5 (原書では頁数の誤植多し)  
 (10) Ernle, op. cit. p. 67~68 Fussel, Introduction lxii  
 (11) Harre, op. cit. Essay II p. 53  
 (12) 筆者の知りうる限り、ウエスタンの導入した broad clover や red clover の断片的にはる最初の記述は、*ibid* Thomas Browden, The Farmer's Director, 1786, p. 53 参照。  
 (13) McDonald, op. cit. p. 67  
 (14) *ibid* Worlge, op. cit. p. 43, Dictionarium Rusticum 43を参照。  
 (15) Harthig, Legacy, 3rd ed. p. 245  
 (16) Loudon's Encyclopedia of Agriculture, Vol. II, p. 872 の改訂版及び新版 p. 772, a.d. 参照。  
 (17) R. Weston, op. cit. Introduction xii

〔後記〕この草稿は、いちおう昨年(昭和四〇)の夏に執筆したものである。

秋になって、総研の稀観書蒐集事業の一環として、大英博物館にイギリス古農書十数冊のマイクロフィルムを依頼することにし、その依頼に対する応答の書名の中に、幸にも本稿の対象とするリチャード・ウエスタンの原著(おそらく一六〇五年の誤植本)とガブリエル・リープの覆刻書が含まれることを知り、その到着をまつて草稿を書き直したいと考えていたところ、総研在職の年度内に到着の見込がなそうなので、不意ながら草稿に手を入れたものを、ノートとして提出することにした。この内容はともかくとして、日本においてこの程度のイギリス古農書の考訂ができるのも、総研図書館のエメリー文庫とその補充として買入れた貴重なコレクションのおかげである。このエメリー文庫は故オノクスフォード大学講師エメリー氏の蔵書一切を、八年前に前所長東畑先生(昭和四〇)の御厚意により農林水産技術会議の特別の財政的補助を得て、幸運にも総研図書館が入手したもので、イギリスにおける先駆的な農業近代化過程の研究資料としては、おそらく世界有数のコレクションと称しうるであろう。

(昭和四〇・三・三二 記)